

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	中川 奈津子
論文題目	Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation（日本語話しことばの情報構造：助詞、語順、イントネーションとの関連）		
（論文内容の要旨） 本論文は、日本語の大規模会話コーパスを用いて、文中の情報の流れを表す情報構造を、主として助詞と語順とイントネーションの分析を通じて明らかにしようとしたものである。 第1章で本論文の目的および方法論を述べた後、第2章では、日本語の基本的な文の構造を示した上で、文の情報構造の主要な概念である主題 (topic)、焦点 (focus)、および名詞句の情報特性 (information status)を定義している。主題は談話機能文法の主要概念でありながら、諸家による定義が一致していないが、本論文では広く用いられている What the sentence is about というaboutnessに基づく定義を退けて、話し手も聞き手も問題としない要素としている。名詞句の情報特性は、Prince (1981)の分類に基づき、話題になってからしばらく時間の経過したdecliningという項目を新たに追加している。 第3章では本論文の理論的背景および依拠する方法論について論じている。本論文ではCroft (2001)ら認知言語学者が提唱した概念スペース (conceptual space)と意味地図 (semantic map)という仮説を採用している。この理論では、概念的に近い項目はひとつの意味空間を形成し、形態面において意味的な断絶のない連続的な地図をなすとされている。また主題や焦点は単一の意味素性に対応するのではなく、複合的な意味素性と関連しているとする多元的な見方を提案している。主題は前提・活性化・定・有生・動作主などの意味素性と、焦点は断定・非活性化・不定・無生・被動作主などの意味素性と対応しており、その対応関係は単線的なものではない。また文の焦点構造には、述語焦点・文焦点・項焦点の3種類を設定し、焦点を特定するために、相手の述べたことを一部否定するNoテストと、相手の述べたことに感嘆するAhaテストを用いるとしている。 次に第4章では、会話コーパスと作例テストを用いて、日本語の助詞と情報構造の関係を詳細に分析している。まず主題マーカーとしては、「というのは」「は」「だが、だけど」および無助詞を認め、「というのは」と「は」は、直前で言及されるなど情報特性において活性度の高い話題に優先的に用いられ、「は」はそれに加えて先行文脈から引き出すことのできる話題にも用いられることを定量的分析に基づいて明らかにしている。このうち「というのは」は後続するコメント部分で主題の一般的性質を表す属性述語を持つことが多い。また「だが、だけど」は、話題になってからしばらく時間の経過したdecliningの要素と、話し手も聞き手も知っていながら話題に上っていない活性度の低い要素を主題化する際に用いられる。またインフォーマルな会話において、無助詞はこれらすべての場合に主題マーカーとして用いられるとしている。一方、文の焦点を示すマーカーとして用いられるのは格助詞、なかんずく「が」と「を」であり、それと並んでインフォーマルな会話では無助詞もまた焦点マーカーとして働く。本論文では文中の意味役割として、他動詞の動作主 (A)、自動詞の主語 (S)、他動詞の目的語 (O)を認め、対照的でない焦点については、AとSは「が」でマークされ、OとSの一部は無助詞で焦点となることを定量的分析から明らかにしている。また対照的な焦点とフォーマルな会話においては、AとSは「が」で、Oは「を」でマークされる。焦点を表すこのような形態素の分布は、本論文が依拠している意味地図の仮説を支持するものであると論じている。 第5章は日本語の文における名詞要素の語順を扱っている。会話コーパスの定量的分析			

と作例によるテストに基づいて、主題のマークを受けた要素、代名詞、話し手も聞き手も知っているが話題に上がっていない要素、および談話において何度も登場する要素は文頭に置かれることが多いことを明らかにしている。このような分布を示すのは、文の意味的处理にかかる認知的コストと、先行文脈との意味的つながりを確保するためである。また会話においては、「何だ、これは」のように述語に後続する名詞・代名詞が頻繁に現れることが知られており、しばしば驚きや否認のような情意的ニュアンスを伴う。本論文ではこのような述語後続要素を詳細に分析し、これらの要素は直前で話題になっていたたり、発話の場に現前していたりして、活性度が極めて高いことを明らかにするとともに、述語後続要素が情意的ニュアンスを持つのは、イントネーション・ユニットにかかる制約のためだとしている。また焦点要素が最も多く出現するのは述語の前であり、その理由は、多くの場合、述語は焦点となるため、焦点要素を隣接させるという「連続性原理」が働くからだとしている。

第6章はイントネーションを扱っている。まず音響的分析に基づいて、句イントネーションと節イントネーションを区別し、主題は文の残りの部分とは独立した句イントネーションを持つが、活性度が極めて高い要素は節イントネーションを持つことを明らかにしている。また焦点要素は多くの場合、節イントネーションを持つが、コーパスの中には例外的に句イントネーションを持つ事例がある。その理由は明らかではなく、今後の研究課題とされている。またコーパス分析から得られたこのような結果を、被験者を用いた作例テストによって検証し、正しいことを確認している。

第7章ではそれまでに得られた結果を総合して、その結果が概念スペース仮説と意味地図仮説に合致していることを示し、また主題・焦点という概念がなぜ多様な意味素性に対応する複雑な関係を持つのかを、Du Bois (1985)の「競合する動機づけ」(competing motivations)という考え方に立脚して説明している。

第8章は本論文の結論で、本研究によって得られた結果が、日本語学のみならず一般言語学において持つ理論的意義を述べ、残された問題について触れている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語の大規模会話コーパスを用いて、文中の情報の流れを表す情報構造を、主として助詞と語順とイントネーションの分析を通じて明らかにしようとしたものである。

日本語は、「太郎は学生だ」と「太郎が学生だ」のように、助詞の「は」と「が」が同一位置において対立的に用いられる言語であるため、明治以来の国語学・日本語学において、いわゆる「は」と「が」の問題が盛んに論じられてきた。その過程で「主題」「焦点」といった概念や、新情報と旧情報という概念が、「は」と「が」の選択を決める要素として提案された。しかし、従来の研究においては、「は」と「が」の対立に注目が集まるあまり、それ以外の助詞や語順との関連性がなおざりにされたきらいがある。また書き言葉やフォーマルな会話に基づいて論じられることが多いために、インフォーマルな会話に多く見られる助詞を伴わない名詞句には注意が払われていなかった。本研究の第一の意義は、「は」と「が」に集中することなく、他の助詞を射程に含めて分析した点、およびインフォーマルな会話における無助詞名詞句も含めて扱った点にある。この意味において本研究は、日本語における主題や焦点の研究として、従来の研究に較べてより包括的なものになっていると言える。

本研究の第二の意義は、小説などのテキストから採取した例や研究者による作例に基づくものではなく、日本語の大規模会話コーパスを用いた定量的研究だということにある。テキストから採取した例や作例は、多くの場合、書き言葉やフォーマルな会話であり、インフォーマルな日常的会話に見られる特徴は抜け落ちてしまう。主題や焦点を表す無助詞名詞句や、述語に後続する名詞句などはその一例である。また作例に基づく研究では、研究者自身の内観による判断に頼ることが多いが、本研究では定量的分析を行うことによって、より客観的な結果を示すことに成功している。

また本研究では、従来から提題の助詞とされてきた「は」だけでなく、「というのは」「けど、だが」なども主題をマークする手段として多く用いられることを明らかにしており、マーキング要素の多様性という点においても、従来の研究より包括的なものになっている。

談話機能文法において「新情報」「旧情報」は、助詞の選択や語順を決めるものとして広く用いられている概念だが、その定義が曖昧であることもつとに指摘されてきた。本論文では、「新情報」「旧情報」という概念に頼ることなく、名詞句の指示対象が聞き手のなかでどの程度活性化されているか、すなわちどの程度意識・注意の中心に置かれているかを表すPrince (1981)が提案した活性化指標 (activation status)に依拠して、同一談話において同じ指示対象を表す名詞句がどの程度離れているかを、両者を隔てる情報単位 (information unit)の数で表すといった定量的分析を施すことによって、活性化の度合いを客観的に示している。このような計量的手段を採ることによって、「新情報」「旧情報」という概念の曖昧さを回避していることに大きな意味があると言える。

本論文が提示した、たとえば活性化の度合いの高い要素、すなわち主題性の高い要素は文頭に置かれる傾向が強いとか、活性化の度合いの低い要素、つまり焦点要素は述語の直前に置かれる傾向が強いといった知見は新しいものではなく、従来の研究においても指摘されてきたことである。本論文の研究成果の新しい点は、ひとつにはこれらの知見を印象や直感によってではなく、定量的分析によって科学的に証明したことと、主題や焦点がなぜそのような位置に置かれることが多いのかを理論的に説明した点にある。主題の位置に関しては、名詞句の表す指示対象を想起し関連する情報を

検索する活性化負荷 (activation cost)と、先行文脈との意味的関連性を表すテキスト的機能が要因として働いており、また焦点位置については、焦点となることの多い述語の直前を焦点位置とすることによって、焦点要素が不連続化することを避ける原理が働くとしている。

本論文が明らかにしたことは、国語学・日本語学にとって重要な知見であるのみならず、一般言語学的射程を持つこともまた重要な意義である。近年の統語・意味論研究において注目されているもののひとつに、Croft (2001) らが提唱する概念スペース仮説と意味地図仮説がある。この仮説によれば、意味・機能的に関連のある要素はひとつの機能空間を形成し、それを担う形態と意味の連関は断絶のない意味地図を作るとされている。これは特定の言語に限った仮説ではなく、Croft (2001) らは普遍的に成り立つ一般言語学的原理だとしている。本論文では、「は」と「が」の対立だけでなく、他の格助詞や無助詞の場合も視野に収めることによって、活性化指標に関わる名詞句の文中における表示がひとつの概念スペースを成しており、その表示のための形態的手段が意味地図仮説の定めるとおり連続体を形成することを明快に示している。この意味において、本論文は国語学・日本語学の一事例研究に留まらず、一般言語学的な射程を持つものであり、言語学への理論的貢献が大きいと言える。

ただ、本研究にも問題点がないわけではない。一つは用いた日本語会話コーパスの統語解析とタグ付けで、用いた言語資料の性質上、唯一的に決定できる場合だけではなく、分析者によって異なるタグ付けがなされることがあり、その点にやや不安が残る。また本研究では、主題や焦点は単一の意味・機能によって定義できるものではなく、多くの意味・機能が関係する多元的な範疇であるとしているが、なぜそのように多くの意味・機能が一つの範疇に競合的に影響するのかという問題にも理論的考察が必要であろう。また本論文の結論において残された問題として挙げられているが、個体レベル述語・局面レベル述語などの述語の意味タイプや、現象文・眼前描写文などの文タイプは考慮されていないので、今後の課題であると言える。

しかしながら本論文は、日本語の文の情報構造と助詞・語順・イントネーションとの相関を包括的に扱い、また定量的分析を施すことで多くの新しい知見を提示しており、国語学・日本語学のみならず一般言語学的にも意味のある研究だと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月17日に、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降